

東洋の思想と宗教 第三十五號 平成三十年（二〇一八）三月 抜刷

『列女傳』研究序説

——中國近世における流布と受容——

仙石知子

## 『列女傳』研究序説

### ——中國近世における流布と受容——

仙石知子

はじめに

前漢の劉向が著した『列女傳』は、女性のあり方を儒教的に規定する教誡書と言われることがある<sup>(一)</sup>。しかし、大島立子は、中島みどりの『列女傳』譯書に對する書評の中で、次のように述べている。「宋代に體系づけられた新儒學の成立以來儒教的な規範がより廣くかつより強くなり、女性を内に閉じ込めてきたことは大方の見解である」<sup>(二)</sup>が、「問題は、貞節が女性の第一に理想とする姿である時代にあつても、本書は女性に對する訓戒書として必讀本であつた」理由にある。それが問題となるのは、「禮の精神を遂行するためには、時に主君をも訓戒し、内よりも大義を重視する」『列女傳』の女

性像と、「内向きの女性像を強調することの多い後世の女訓書との間に隙は大きい」からである。

後述するように、現在通行本となつてゐる復原された劉向『列女傳』は、儒家的政治道德を宣揚し、外戚・後宮の專横を抑制するために著されたものであり、貞節を中心とした女性の婦徳を教育するための教科書ではない<sup>(三)</sup>。しかし、『紅樓夢』第四回では、『列女傳』は女訓書の「女四書<sup>(四)</sup>」と同列視されている。

(李守中は)「女子は才が無いことを徳とする」と言つた。

そのため娘(賈珠の妻)が生まれたときにも、「むやみに讀書などをさせることはない。ただ「女四書」・『列女傳』などを讀ませ、いくつか文字を覚えさせ、前朝の何人か

の賢女を記憶できればそれでよい。……」(と言った<sup>(五)</sup>)。

ここでは、「女四書」と『列女傳』は、女子が讀むべき女訓書として同列に把握される。そこには、大島が述べるような「隙」はない。『列女傳』は、明代以降、多くの版本が公刊されているが、それらの中には、可能な限り劉向の原著を復原しようとするもの他に、新たな女性の話を増廣したものの、原著を易しく改めたものなどもあり、多く流通して受容された。注(三)所掲池田論文の述べるように、劉向の本來的な執筆目的が儒家的政治道德を宣揚し、外戚・後宮の專横を抑制することであるならば、中國近世における女訓書としての『列女傳』の流通・受容との間には乖離がある。これが大島が述べる「隙」である。

この問題を解決するためには、中國近世當時における通行本が、従來の研究において主たる對象とされてきた現在通行本となっている劉向の原著『列女傳』ではなく、原著を易しく改め、あるいは新たな女性の話を増廣した「俗本」だったのではないか、という假説の立證が有効である。

本稿は、改變・増廣された「俗本」『列女傳』の流布と受容を研究するための序説として、『列女傳』の展開と「俗本」における改變・増廣の一端を明らかにするものである。

## 一、「列女傳」の展開

劉向が『列女傳』を執筆した本來的な目的について、『漢書』卷三十六楚元王傳は、次のように述べている。

(劉) 向俗の彌掩奢淫にして、而して趙・衛の屬微賤より起こりて禮制を踰ゆるを睹たり。向以爲へらく、<sup>①</sup>王は内より外に及ばば、近き者より始むべしと。故に詩・書に載する所の賢妃・貞婦を採取して、興國・顯家の法則とす可く、孽嬖・亂亡する者に及ぶ。序次して列女傳を爲ること、凡そ八篇、<sup>②</sup>以て天子を戒む。及び傳記・行事を采り、新序・說苑を著すこと凡そ五十篇、之を奏す。

劉向は、①「王教は内より外に及」ぶと述べるように、儒教によつて國を治める際、内のことから始めるべきであると認識していた。そのために、②「天子を戒む」ことを目的として、『新序』・『說苑』のほかに『列女傳』を著した。具體的には、『詩經』や『尚書』から賢妃・貞婦の記事を集め、さらに國家を亂す悪女についても記すことで、「天子を戒めようとしたのである。注(三)所掲池田論文も、劉向の著作の目的は、王教という儒家的政治道德を宣揚し、外戚・後

宮の専横を抑制するに在ったと述べているが、首肯し得る見解と言えよう。

續いて、宮本勝の研究をもとに、『列女傳』の著録を整理しよう。『漢書』卷三十藝文志には、「劉向序する所の六十七篇〔新序、說苑、世說、列女傳頌圖なり。〕」とあり、班固は、劉向の編纂した六十七篇のうちに、『列女傳頌圖』が含まれていた、としている。また、『隋書』卷三十三經籍志二には、「列女傳 十五卷、劉向の撰、曹大家の注。列女傳七卷、趙母の注」とあり、『隋書』經籍志は、劉向の『列女傳』として班昭（曹大家）が注をつけた十五卷本と趙母（虞韜の妻）が注をつけた七卷本を著録する。しかし、これらはやがて散逸する。

北宋に編まれた王堯臣・王洙・歐陽脩等（奉敕撰）『崇文總目』卷四には、「列女傳 十五卷」とあり、慶曆元（一〇四一）年には、十五卷本が存在したことが分かる。また、陳振孫（撰）『直齋書錄解題』卷七には、「古列女傳 九卷。……隋・唐の志及び崇文總目は皆十五卷なり。蓋し七篇を以て分かちて上下と爲し、頌を并はせて十五卷と爲す。……王回・曾鞏の二序辨訂すること詳し」とあり、南宋の十三世紀前半になると、王回と曾鞏の序文の付いた九卷本の存在が分かる。これ以後、

『宋史』卷三十藝文志二、『文獻通攷』卷一百九十八經籍攷にも九卷本が著録される。

以上のような目録學における著録に對して、現在、見ることのできる最古の『列女傳』は、『新編古列女傳』（通稱「余氏本」、今は『叢書集成新編』所收本に據る）である。その「序」によれば、北宋の嘉祐年間（一〇五六―六三年）には、曾鞏・王回（編定）『古列女傳』九卷本があり、それは傳文七卷と頌一卷に再編され、續列女傳一卷が付されたものであった。南宋の嘉定七（一二二四）年には、蔡驥『古列女傳』八卷本があり、それは頌文が各篇末に分散して附記されており、列女傳七卷と續列女傳一卷が合わせて八卷とされたものであった。

これらを承けた『新編古列女傳』（通稱「余氏本」）は、卷末に「列女傳八卷、宋の建安余氏の刻する所なり。余氏は名を仁仲、曾て注疏を刊す。……蓋し明の内府藏本なり。書尾に永樂二年云云の一條あるも、何人の書爲るかを知らず（列女傳八卷、宋建安余氏所刻。余氏名仁仲、曾刊注疏。……蓋明内府藏本也。書尾永樂二年云云一條、不知爲何人書矣）」と記されているように、南宋に出版された建安余氏の原本は殘存せず、永樂二（一四〇四）年の書尾を持つ明の内府が藏したという摹刻本に現行本は由來する。

清代になると、主として「余氏本」に基づき、原著の『列女傳』を復元しようとする者たちが現れる。注(三)所掲下見著書によると、代表的なものは、次の四者である。

(1) 顧廣圻『列女傳攷證』(嘉慶十一年一七九〇年刊)

關連書を参照し本文を検討して、傳寫訛脱を見いだし、誤りは字を改め、別に「攷證」をまとめて後に付す。段玉裁の校語も多數取り入れる。

(2) 王照圓『列女傳補注』(嘉慶十一年一八〇五年序)

夫である郝尊の説を「夫子曰」として引用。「校正」の中には、王念孫・王引之父子、阮元、馬瑞辰らの校勘・研究の成果が引用される。

(3) 梁端『列女傳校注』(道光十一年一八三一年刊)

梁玉繩の孫、汪遠孫の妻。諸家の説を多く引き、出典を明らかにする。類書や『文選』の注などを用い、本文を積極的に改訂。

(4) 蕭道管『列女傳集注』(光緒十八年一八九二年序)

陳衍の妻。王注本を底本としながら、梁注本により校勘。兩書の誤解を指摘し、遺漏を補う。

これらのうち、(2)・(3)・(4)は、いずれも考證學者の妻や娘であり、上位の社會階層を生きた女性である。難解な古典を

復元しようとする女性がいたことは、特記すべきであろうが、中國近世に流通していた女訓書としての『列女傳』を検討する際には、あまりに特殊に過ぎる。王照圓・梁端・蕭道管といった、最上流階層の女性たちが修めた『列女傳』と、中國近世における教訓書としての『列女傳』との間には、大きな乖離があるのではないか。明清小説にしばしば言及される教訓書としての『列女傳』は、劉向の原著を復元したものではなく、坊刻本として競って出版されていた「俗本」の『列女傳』なのではないか。

「はじめに」で掲げた『紅樓夢』の、「娘には『列女傳』・『女四書』を讀ませ」ておけばよいという描寫は、劉向の原著を復元したものではなく、坊刻本として競って出版されていた「俗本」の『列女傳』なのではないか。それでは、明清時代に多數出版されていた俗本の『列女傳』は、どのような特徴を持つのか。具體的には、劉向『列女傳』とどのような關係を持ち、その通俗性はどのようにして生まれたのであろうか。本稿は、「俗本」の『列女傳』に二類型を想定し、それぞれの特徴を考えていく。

第一は、物語の改變である。二で扱う馮夢龍『列女傳演義』は、劉向『列女傳』を白話に譯すと共に改變する。また、話

末に入っていた經書の引用を一部削除して、自らの主張を強調する場合もある。もちろん、悪女の話を集めた孽嬖傳は削除される。ここに、劉向の重視した外戚への批判が含まれるのであるが、「俗本」では扱われない。

第二は、物語の増廣である。三で扱う汪道昆『明刻歷代列女傳』は、劉向『列女傳』に本来含まれなかった様々な由來を持つ女性の話を大幅に加えていく。その數三一話、原著の一〇四話の約三倍にあたる。余氏本にはすでに、「續列女傳」が附せられており、増廣への方向性をみせていた。また、加えた話の多くは、話末に經書が附され、『列女傳』としての格式を保とうとしている。これも、悪女の話を集めた孽嬖傳は削除されている。

それでは、この二つの對照的な「俗本」に収録された話をそれぞれ二話ずつ取り上げ、『列女傳』の流布と「俗本」における話の改變・増補を検討していこう。

## 二、馮夢龍『列女傳演義』の特徴

短篇白話小説集『三言』も編纂している明末清初の馮夢龍が著した『列女傳演義』は、劉向の原著『列女傳』を明末清初の社會風潮にあわせて改變し、自らの主張を述べている。

『列女傳』研究序説（仙石）

明末清初の馮夢龍は、清朝考證學者の復原成果を見ることはできない。したがって、馮夢龍が基づいた『列女傳』は、清朝考證學者が底本として用いた『新編古列女傳』（通稱「余氏本」）である蓋然性が高い。そこで、『新編古列女傳』に底本として、劉向『列女傳』卷四貞順宋恭伯姬を掲げよう。

伯姬なる者は、魯の宣公の女にして、成公の妹なり。其の母は繆姜と曰ひ、伯姬を宋の恭公に嫁す。恭公親迎せざるも、伯姬父母の命に迫られて行く。既に宋に入る。三月にして廟見し、當に夫婦の道を行ふべきも、

伯姬恭公の親迎せざるを以て、故に命を聽くを肯せず。宋人魯に告ぐ。魯大夫の季文子をして宋に如かしめ、命を伯姬に致す。還りて復命す。公之を享す。繆姜房より出て、再拜して曰く、「大夫遠道に勤勞し、辱くも小子を送る。先君を忘れず、以て後嗣に及ぼす。下をして知有らしめば、先君も猶ほ望有らん。敢て大夫の辱きに再拜す」と。伯姬既に恭公に嫁すこと十年、恭公卒し、伯姬寡たり。景公の時に至り、伯姬常て夜に失火に遇ふ。左右曰く、「夫人少しく火を避けよ」と。伯姬曰く、「婦人の義、保傳來たらずんば、夜に堂を下らず。保傳の來たるを待たん」と。保母至るも、傳母未

だに至らず。左右又曰く、「夫人少しく火を避けよ」と。伯姬曰く、「婦人の義、傅母至らずんば、夜に堂を下る可からず。義を越へて生を求むるは、義を守りて死するに如かず」と。遂に火に逮びて死す。春秋其の事を詳録して、伯姬を賢と爲し、以爲へらく、婦人は貞を以て行と爲す者なり。伯姬の婦道盡くせりと。此の時に當たりて、諸侯之を聞き、悼痛せざるは莫し。以爲へらく、死する者は以て生く可からざるも、財物は猶ほ復す可しと。故に相與に澶淵に聚會して、宋の喪ふ所を償ふ。春秋之を善す。

君子曰く、「禮に、「婦人傅母を得ずんば、夜に堂を下らず、行くに必ず燭を以てす」と。伯姬の謂なり。詩に云ふ、「淑く尔の止を慎みて、儀に愆らず」と。伯姬儀を失はざると謂ふ可きなり」と。

頌に曰く、「伯姬心を専らにし、禮を守りて意を一にす。宮に夜失火ありて、保傅備はらず。火に逮びて死すも、厥の心悔ゆる靡し。春秋之を賢とし、其の事を詳録す」と。

(補注)

(一) 繆姜の傳は、嬖嬖傳にある。

(二) 『春秋公羊傳』隱公二年に、「外逆女、不書、此何以書。譏。何譏爾、譏始不親迎也」とある。

(三) 『春秋』成公九年に、「二月、伯姬歸于宋。夏、季孫行父如宋致女」とある。

(四) 『春秋左氏傳』成公傳九年に、「穆姜出于房、再拜曰、大夫勤辱、不忘先君、以及嗣君、施及未亡人、先君猶有望也。敢拜大夫之重勤、又賦綠衣之卒章而入」とある。

(五) 『春秋穀梁傳』襄公三十年に、「會不言其所爲、其曰宋災故、何也。不言災故、則無以見其善也。其曰人、何也。救災以衆、何救焉。更宋之所喪財也。澶淵之會、中國不侵伐夷狄、夷狄不入中國、無侵伐八年、善之也。晉趙武・楚屈建之力也」とある。

(六) 『詩經』大雅抑に、「淑慎爾止、不愆于儀」とある。

このように、春秋時代の魯の宣公の娘であつた伯姬は、宋の恭公と婚約をしたが、傍線部にあるように、當初、夫となる恭公が親迎しなかつたので夫婦にならなかつた。結局、夫が伯姬の母に告げ、伯姬は嫁いだが、十年して恭公は薨去し、伯姬は寡婦となる。あるとき屋敷が火事になり避難を求められるが、伯姬は、婦人の義として、保母と保傅がいなければ堂を出られないとして焼け死ぬ。「君子曰く」では、夫人は保母なく夜に堂から出ないことを禮として、『詩經』を引く。



そして、「頌に曰く」として、伯姬を『春秋』が「賢」としたことを確認するのである。

すなわち、余氏本『列女傳』は、親迎を重視せず、夫が死んだあたかも命をかけて貞節のための禮を守ったことのみを宣揚する。伯姬の婚姻に際して親迎が行われなかったことは、『春秋公羊傳』・『春秋左氏傳』には明記されない。しかし、劉向が専門とする『春秋穀梁傳』には、それが觸れられる。ただし、『春秋穀梁傳』も、親迎を詳細に描くわけではない。このため劉向『列女傳』では、親迎がこのあとどうなったのかを記さず、『春秋穀梁傳』と同様に、使者の季文子を母の繆姜が迎える話を入れており、親迎の有無はしり切れとんぼになって明記されない。

これに對して、②に擧げている馮夢龍の『列女傳演義』四卷に収録されている伯姬の話では、焼け死んでも禮を守ったことよりも、親迎という禮を夫が行わなかったことにこだわった伯姬が賞賛されている。

伯姬というものは、魯の宣公の娘、成公の妹である。

その母は繆姜と呼ばれた。伯姬は宋（の恭公）と婚約し、婚禮の日に至り、宋の恭公は道が遠いので、親迎に來なかつた。伯姬は行きたくなかつたが、父母は再三これを

遣わした。伯姬は父母の命に迫られて（宋に）行った。すでに宋に至り、廟見の後に、夫婦の禮を行うべきであつた。（しかし）伯姬は辭して言つた、「<sup>①</sup>親迎は婚姻の（六）禮（の一つ）です。あなたはすでに親迎を行わず、わたしに禮を失せております。わたしはあえて禮を失したまま、婚姻をすることに安寧でいられましょうか」と。恭公はやむを得ず、また人を使わして魯君に告げた。魯君は大夫を遣わし、再三（婚姻をしよう）伯姬に命じた。伯姬はそうした後にようやく（父の）命に従つた。そして成婚して伯姬が恭公に従うこと十年、恭公は薨去し景公の時に至ると、伯姬は寡婦として過ごしていた。あるとき夜更けに火事がおこり、お付きのものは驚き慌て、夫人に早く非難するようお願いした。伯姬は言つた、「婦人の義では、夜に堂を下ることはありません。もし堂を下りたければ、また保母と傅母が共に従う必要があります。そののちにあえて下りましょう」と。お付きのものは急いで保母と保母を呼んで至らせた。お付きのものはまたお願いして言つた、「火が近づいております。保母はすでに至りましたので、どうか早く非難してくださいますように」と。伯姬は言つた、「保母は至りましたが、



傅母が至っていないのであれば、保母も至っていないのと同じです。わたしはどうして軽々しく行動して義を失うことができましようか。わたしは義を失って生きるよりは、義を守って死ぬことを優先したいと思えます」と。お付きのものは再び急いで傅母を召しよせた。しかし火がすでに至り、伯姫に火がまわって死去しだ。諸侯は之を聞き、悲しみ悼まぬものはなく、財をもちより宋の（伯姫）埋葬の費の足しにした。

伯姫の前後の行動をみると、禮はまことに少しでも失うことを認めないことが分かる。禮に親迎があれば親迎を争い、禮に成婚があれば成婚を争い、禮に保・傅がいなければ堂を下れないとあれば、保・傅とともに堂を下ることを争う。（そうして禮を失わないことは）火に死ぬことを考えないに至った。<sup>②</sup>（伯姫が）恭公が既に死んでもなお禮を守って失わなかった（ことも情として重要である）けれども、（伯姫が）恭公が親迎しないために成婚の禮を争ったことは、情として行き過ぎではない（立派な行爲である）。

このように、馮夢龍『列女傳』は、①親迎をしない失禮が、いかに甚だしいことを語る伯姫の言葉を加えることで、親

迎の重要性を説く。それと共に、親迎がない、という重大な過失により成婚を拒否する伯姫であっても、父母の「命」には従って、婚姻すべきことを主張する。ここには、婚姻は家のものであり、父母の「命」には従うべきとする女訓書としての性格が明確に表れている。また、②夫が死んだあとも命をかけて貞節を守るための禮よりも、親迎という禮を守るために争ったことが立派な行爲であると、馮夢龍は主張する。婚禮における家と家との結びつきを象徴する親迎という禮の中國近世における重要性を見ることができる。

『儀禮』士昏禮では、婚姻の成立要件として、禮に基づく婚禮様式「六禮」が定められていた。すなわち、「納采」（男家から女家に正式に結婚の申し込みをする）、「問名」（吉凶を占うため女の名を問う）、「納吉」（占いで吉と出たことの報告）、「納徵」（男家から女家へ聘財を納める）、「請期」（結婚の日取りを決める）、「親迎」（男が女家まで女を迎えに行く）である。しかし、中國近世になると、六禮は簡略化され、『朱子家禮』卷三昏禮は、六禮を盡く行うことはできないので、「納幣」と「納采」「親迎」を行えばよいとする。これらのうち、定婚（婚約）と成婚のうち、成婚時に行うものは、「親迎」だけである。「親迎」とは、男家から乗り物を差し向けて、原則としては婚が出向

いて、女を迎えてくる儀禮である。

中國近世において、女家と男家はそれぞれ別に自家の親戚知人呼んで酒宴を開く。男家では、女を迎えた上で、天地を拜する禮、祖靈及び夫の父母をはじめ尊長を拜する禮などが行われる。最も重要なことは、行列を組んで嫁を迎えて來ることであり、この際の嫁の乗り物は傳統的に紅色の裝飾を施した駕籠と決まっていた。周圍から一目でそれを分かる乗り物で迎えられて男家の門を入ることが、女が正當な妻の身分を取得したことの何よりの確かな公證手段となつたのである。

このように、馮夢龍『列女傳演義』は、當該時代の社會風潮に合致させるため、親迎を重視した話に改變しているのである。さらに、馮夢龍『列女傳演義』は、自らの主張を加えることで、『列女傳』を讀者に共感させようとしている。余氏本から掲げよう。

貞姬なる者は、楚の白公勝の妻なり。白公死するや、其の妻紡績して嫁がず。吳王其の美にして且つ行有るを聞きて、大夫をして金百鎰・白璧一雙を持ちて以て焉を娉せしむ。輜軒三十乘を以て之を迎へ、將に以て夫人と爲さんとす。大夫幣を致すも、白の妻之を辭して曰く、

『列女傳』研究序説（仙石）

「白公生けるの時、妾幸にも後宮に充てられ、箕帚を執り、衣履を掌り、枕席を拂ひ、託せられて妃匹と爲るを得たり。白公不幸にして死す。妾願はくは其の墳墓を守りて、以て天年を終へん。今王金璧の聘・夫人の位を賜はるも、愚妾の聞くる所に非ざるなり。且つ夫れ義を棄て欲に従ふ者は、汚なり。利を見て死を忘るる者は、貪なり。夫れ貪汗の人なれば、王何を以てか爲さんや。

妾之を聞く、忠臣人に借するに力を以てせず、貞女人に假すに色を以てせずと。豈に獨り生に事ふるに此の若くするのみならんや、死者に於てするにも亦た然らん。妾既に仁ならざれば、従ひ死する能はず。今又去りて嫁するは、亦た太甚ならんや」と。遂に聘を辭して行かず。吳王其の節を守り義有るを賢として、號して貞姬楚と曰ふ。

君子謂へらく、「貞姬廉潔にして誠信なり。夫れ任重くして道遠く、仁以て己が任と爲すは、亦た重からずや。死して後已むは、亦た遠からずやと。詩に云ふ、「彼の美しき孟姜、德音忘れず」と。此れ之の謂なり」と。頌に曰く、「白公の妻、寡を守りて紡績す。吳王之を美とし、娉するに金璧を以てす。妻操行を固くし、

死すと雖も易へず。君子之を大たかび、其の嘉績を美ほむ  
(二四)

(補注)

(一) 『論語』泰伯篇に、「曾子曰、士不可以不弘毅。任重而道遠。

仁以爲己任、不亦重乎。死而後已、不亦遠乎」とある言葉を踏まえている。

(二) 『詩經』鄭風有女同車に、「彼美孟姜、德音不忘」とある。

楚の白公勝の妻である貞姫は寡婦になつた後、吳王の夫人に請われたが、「貞女人に假すに色を以てせず」と申し出を拒否する。吳王は節を守り義を備へた貞姫を賢であるとして、楚白貞姫という尊號を與へた。「君子曰く」ではこれが、『論語』の「死して後已む」、『詩經』の「孟姜」を引用して宣揚される。これは、中國近世における『列女傳』受容の中心に置かれるようになる、女性の貞節を強調する話である。馮夢龍『列女傳演義』は、これを次のように改變したうえで、自らの主張を加えている。

貞姫というものは、楚の白公勝の妻である。白公が死ぬと、その妻は絲つむぎを生業とした。志に誓つて嫁がなかつた。吳王はその美貌で（貞節を貫くという）行いがあることを聞き知り、大夫を使者として金百鎰、白璧一

雙を持たせ、親しく其の門に至らせ聘して夫人にしようとした。（大夫には）輜車三十乘を随わせ備えてこれを迎えた。白の妻はこれを見て、辭退して言った、「わたしが聞くところでは①女が従う夫は、ただ一人であると申します。白公が在りし日に、わたしは幸にもすでにその後宮に充てられ、その箕帚を取り、衣履を掌り、その枕席を拂い、妃匹となることを託されました。白公は不幸にも亡くなり、わたしは殉死すべきでしたが、今すでに果たせませんでした。またその墳墓を守り、天壽を全うしたいと思ひます。どうしてまた嫁ぐと言へるでしょうか。いま王は金璧の聘と、夫人の位を賜りましたが、卑しいわたしをあえて受けることではございません。また伺いますに王がわたしを聘そうとされたのは、わたしに行いがあるからとのこと。もし義を棄てて欲に従へば汚濁となります。利を見て死を忘れれば貪欲になります。貪欲で汚濁な人が、またどうして行いがあり王の聘をかたじけなくできるでしょうか。わたしはまた聞くところでは忠臣は賢愚をとわず①一君に従ひ、人に力を借さず、貞女は美醜をとわず①一夫に従ひ、人に色を假さないと申します。どうしてただ生きる者に仕えるときだけ、こ

のようすにすべきでしようか。死んだ者に對してもまたこのようにすべきなのです」と言った。こうしてその金壁を返して納れなかった。吳王はその守節を賢として、號して貞姫として強いることはなかった。

②君子は「貞姫を廉潔で誠信である」と言った。詩には、「彼の美しき孟姜は、德音忘れず」とある。これはこのことである。

人はみな白姫の守貞を言い囁す。(たしかに)白姫の言葉はよかつた。(しかし)③わたしは一人、「姫は幸いにめぐり合つた」と言いたい。何が幸いなのか。吳王が一時に感じ悟つて強いて逼ることがなかつたことが幸いである。これに強いて逼ま<sup>せま</sup>つていれば、またどうなつていたか分らない、これが幸いである。<sup>(四五)</sup>

馮夢龍『列女傳演義』は、①「女が従う夫は、ただ一人である」と、貞姫の言葉を分かりやすく具體的に改變して、妻は一人の夫にのみ従うことを繰り返して強調している。これにより、女性の貞節の強化を促すような教訓的な文章になつていることが分かる。さらに、『論語』は削除したものの、さほど難しくない②「君子曰」と『詩經』は、そのまま引用して『列女傳』としての格調を維持しようとしている。さらに馮夢龍

は、③「わたしは一人、「姫は幸いにめぐり合つた」と言いたい」と自分なりの物語解釋を加えることで、古典である『列女傳』を読み替え、讀者の關心を高めるようとしていたのである。

馮夢龍の『列女傳演義』の特徴は、『列女傳』を白話で表現して、文言を読みにくい階層への浸透を圖ると共に、中國近世の社會通念に合わせた改變を加えることで、教訓書としての役割を果たそうとしたことにある。さらに、自分なりの物語解釋を行うことで、古典の読み替えを試み、讀者を獲得しようとしていったものである。

### 三、汪道昆『明刻歷代列女傳』の特徴

劉向『列女傳』にはなかつた女性の話を大幅に増廣した『列女傳』の例として、明の汪道昆の撰による『明刻歷代列女傳』を取り上げよう。汪道昆が加えた話の中には、三國時代に蜀漢を建國した劉備の軍師となつた徐庶の母、徐母の話がある。これについては、種本として『三國志演義』が想定される。

『三國志演義』には、多くの版本があるが、『李卓吾先生批評三國志』(以下、李卓吾本と稱する)には、次のように語られる。曹仁の八門金鎖の陣を破つた「單福」という新しい劉備の軍師が、徐庶であることを知る程昱は、徐庶を歸服させるた

めに至孝な人となりを利用すべきである、と曹操に進言する。曹操は人をやつて徐母を連れて來させ、徐母に手紙を書くように勧める。その際、曹操は、徐母から劉備のことを聞かれ、劉備のことを悪く言う。それを聞いた徐母は怒り、曹操に硯を投げつける。

徐母は兩目をキツと見開いて、激しい口調で「あなたの話はまったくのでたらめ。わたくしがかねてより聞いてゐるのは、玄德様とは中山靖王の末孫、漢の景帝閣下の玄孫に當たり、堯舜の風を學び、禹湯の徳を懐くお方であるということですよ。〔素晴らしいご婦人だ。〕その上また遜つて賢者を招き、恭しく人を貴び、世の子供から老人、牛飼いや樵まで、みながその名を知つております。眞に當世の英雄です。わが息子はこの方を助け、主を得たのです。あなたは漢の丞相を名乗りながらも、實際には漢の國賊です。それなのに玄德様を逆臣と呼んでいます。〔聖婆聖母である。漢朝第一の忠臣である。〕自ら心に恥すべきですよ。わが息子に明君に背き暗君に投じさせるようなことがあれば、萬代の惡名を取らせるようなもの」と言った。言い終わるや、筆を床に投げつけ、硯を手にするや曹操に投げつけた。<sup>(六)</sup>

程昱の偽手紙を受け取り、それを信じた徐庶は、母が曹操のもとで辛い目に遭つてゐると思ひ、曹操に歸服することを決める。それを聞いた劉備は、忠よりも孝を優先すべきであると、徐庶を曹操のもとに送り出す。曹操に歸服した徐庶が現れると、徐母は今まで學問をしてきて忠孝が兩全しないことを知つていながら、なぜ戻つて來たのか、と徐庶を罵る。

「わたくしはどんな顔でそなたに會えましょう。祖宗の家門に傷をつけ、どうやつてこの世界に生きられるのですか」。罵られた徐庶は、階の下にひれ伏して、(母の)顔を見ることができなかつた。母は自ら屏風の後ろへ行つたが、少しして人が知らせてやつてきて、「大奥様が梁で首をくぐられました」と言つた。徐庶が慌てて入つて助けようとしたが、母の息はすでに途絶えていた。「死ぬことで快さを手にいれた。人生におけるこのような死は、大きな幸せである。<sup>(七)</sup>」

徐庶は、偽手紙だと見抜けず、忠と孝が兩全しないことを知りながらも、君主である劉備を棄て、孝を選んで母のもとに驅けつける。徐庶に絶望した徐母は首を括つて死ぬ。李卓吾本は、評をつけて徐母を「聖婆聖母である。漢朝第一の忠臣である」と徐母の行爲を稱賛している。<sup>(八)</sup>

これに對して、『明刻歷代列女傳』は、徐母の話を次のように掲げている。

漢末の謀士である徐庶の母は、賢にして智があつた。

先主（劉備）が新野に逃れると、曹操は將を遣わし劉備を攻めた。このとき徐庶は單福と姓名を變えて、先主のために策を立てており、火攻により曹軍を大破した。曹操は調べて徐庶の計であることを知ると、計略によりその母を呼びつけ、徐庶を招くための手紙を書くように追つた。母は言うことを聞かなかつた。母は書をよくしたので、曹操は母を拘束し、ひそかに人に母の書法を習わせ、徐庶の母と偽つて手紙を書かせ徐庶に送つた。徐庶はそれが詐りであることが分からず、手紙を見て大いに哭いた。かくて先主のもとを辭し曹操に歸し、先主もまた徐庶の母が命のあることを思い、強く留めることはなかつた。曹操のもとに至り母に拜謁すると、母は曹操の計に落ち、一たびついた順（である劉備）を棄て逆（である曹操）に就いたと徐庶を責め、密かに寢室の中に入ると、繩を括つて自ら首切れて死んだ。徐庶は痛恨し水すら喉を通らなかつた。のち徐庶は魏に終わつたが、生涯（曹操の）ために謀略を立てることはなかつた。

『列女傳』研究序説（仙石）

君子は、「徐庶の母は、威に脅されることはなく、利に誘われることもなかつた。<sup>①</sup>傳に、「子を教えるには義により、邪を納れてはならない」とは、このことを言っている。死を輕んじた行の高きものである。<sup>②</sup>論語に、「君子は身を殺して以て仁を成し、命欲しさに仁を損なうこととはない」とは、このことを言っているのである。<sup>（九）</sup>

このように『明刻歷代列女傳』は、李卓吾本に記される徐庶の母の物語を簡潔にまとめ、讀みやすくしている。そして、文末に、①『春秋左氏傳』隱公傳三年、②『論語』衛靈公篇を掲げることにより、元來の『列女傳』の體裁を踏襲して、『列女傳』としての格式を保ち、原著『列女傳』の系統を繼ぐ書であることを表現している。單に女性の物語を加えただけではないのである。

また、明の瞿佑が記した短篇文言小説集である『剪燈新話』から取材している話もある。『剪燈新話』は翻譯しているのて詳細はそれに譲り、ここでは要約のみを掲げよう。

浙江省嘉興の名妓、愛卿は、美貌と才藝に恵まれ、また非常に貞淑な女性だった。同郡に住む趙に見初められ、妻となった。しばらくして趙は、官吏の職に就くため、愛卿と趙の年老いた母を家に残して都へと旅立つた。母



が病氣になると、愛卿は獻身的に看病した。しかし、病氣は治ることはなく母は息を引き取った。その後、戦亂が激しくなり、趙の家は楊完の部下の劉萬戸に占據された。身が汚されることを恐れた愛卿は、自ら首をくくつて命を絶つた。しばらくしてようやく郷里に戻つてきた趙は、愛卿が操を守つて自害したことを知ると、愛卿の亡骸を掘り起こし、體をていねいに洗つてやり、埋葬してやつた。ある晩、愛卿は趙に別れを告げるために姿を現した。そして、明日、自分は宋の家の男の子として生まれ變わると言つた。翌朝、趙が宋の家を訪ねてみると、すでに男の赤ん坊が生まれていた。趙から詳しい事情を聞いた宋夫婦は、この赤ん坊を羅生と名付けた。

このように、本來の愛卿の物語は、妓女から妻になり、姑に盡し、妓女出身であるのに貞節を守るために自殺をし、感謝した夫が墓に埋葬して、さらに男の子として生まれ變わり、羅という本來の苗字を残した名をつけてもらった、という複雑な物語である。それを『明刻歴代列女傳』は、次のように表現する。

宋の羅愛卿は年十八で、趙の息子に嫁いだ。趙は官僚の職を求めて都へ立つとき、愛卿は詞を作り別れを述べ

て次のように言つた、

情けは出世の邪魔にはならぬ、別れの宴の金縷の歌。

老いたまいし母、年若き妻、君去りしのち、誰をかたよらん。

流るる月日は幾ばくぞ、ましてや風吹き雨降る日々の淋しさよ。

つがいの鳥も今は仲をさかれ、再び逢えるはいつの日か。

君のねんごろな言の葉胸に秘め、母堂にお仕え怠らず、辛さ苦しさにも愚癡など言わず。

君は今お官なみに召され、やがては錦をまといて、妻も母も榮受はえくる日を待ち望む。

君よ心にとめたまへ、日暮れは近く、愁いは多し。早々ともどりきませや、綵衣をまとい舞うべし。

のち亂に乗じて劉萬戸に虜こえられたが、誓つて辱めを受けず、かくて自ら首を縊つて死んだ。(三三)

このように、『明刻歴代列女傳』は、同時期の文言小説の複雑な内容を貞節のみに絞つて、簡単に整理している。中でも、『剪燈新話』の詩の部分に注目し、そこを重點的に引用する。『列女傳』は、その成書當初から、頌と呼ばれる四字



句のまとめ部分が附されており、物語の概要を暗唱し易くすると共に、圖を描いたときに畫贊として掲げ得る内容を持っていた。本話における詩の重視は、こうした意味で、經書を引用するのと同様の『列女傳』らしさの表現である。

『明刻歷代列女傳』は、明代に流行した『三國志演義』や『剪燈新話』に現れる女性像を簡潔に抜き出し、經書を附し、「頌」の形式を意識することで、「列女傳」としてふさわしいものへと書き換え、「列女傳」という古典世界の中に、当該時代の人物像を加えることで、その人物の表現に正統性を加えると共に、古典を物語として読み易くしていく、という通俗化の傾向を持つ。

### おわりに

『列女傳』が本來有していた、國政に關與する女性（外戚）の批判（孽嬖傳を中心）から、中國近世の女訓書へと轉換していくためには、「通俗」化を進める必要性があった。従來の『列女傳』研究が重視してきた、劉向の原著への復原は、考證學者の娘など限られた者たちが、教訓となる女性像を世に広めるといふ目的ではなく、劉向の經學、あるいは漢の學術を解明していくための學問として行った營爲であり、そこに女訓

書としての『列女傳』普及の原因を求めることができない。

馮夢龍『列女傳演義』は、『列女傳』を白話で表現して、文言を讀みにくい階層への浸透を圖ると共に、中國近世の社會通念に合わせた改變を加えることで、教訓書としての役割を果たそうとしたことにある。また、經書の引用をも一部削除してまで、古典を讀み替え、中國近世の社會風潮を背景とする禮の重要性を加えた。これにより、遠い昔の女性たちは、當該時代の女性に近づき、その規範として教訓の對象と成り得たのである。

一方、汪道昆『明刻歷代列女傳』は、女性の對象を明代にまで廣げ、あるいは明の小説で著名であった徐庶の母や羅愛卿などを取り上げることにより、「増廣」という型での通俗化を試みた。余氏本にも附せられていた「續列女傳」は、この方向による時代への適合方法を示唆するものであった。そして、汪道昆『明刻歷代列女傳』もまた、物語の最後に『論語』などを加え、あるいは「頌」の形式に通ずる詩を重視することで、古典としての『列女傳』らしさを守ろうとしたのである。

なお、日本で流通した承應本『列女傳』は、劉向の原著である『古列女傳』、班昭の作ともされる『續列女傳』に加えて、『新續列女傳』として周代から元代までの中國、百濟・高麗

を含む朝鮮諸國の列女百九十人を加えている。これらは、(明)解縉『古今列女傳』・(李氏朝鮮) 傑徇『三綱行實』のほか、『閩範圍集』・『增補列女傳』・『音釋列女傳』などから採録して、地域・年代順に配列したものである。これらの話は、ほぼ末尾に經書を附さないが、一部に附すものもある。すなわち、今回取り上げた馮夢龍『列女傳演義』と汪道昆『明刻歷代列女傳』の間には、多くの「俗本」が存在するのである。

こうした二方向での通俗化が必要であつた理由は、受容層との関わりがある。近世においても、『列女傳』を読むのであれば、當然原著を復元した『列女傳』を古典として讀むべきであるが、その難解さのゆえに實際には『列女傳』と掲げながら、原著に手を加えた俗本系の『列女傳』が流布し、受容されていた。『列女傳』における通俗化の必要性は、讀者層からの要請にもよろう。現在のところ、馮夢龍『列女傳演義』の方向が、より低層の社會階層に向けられていると考へているが、これらの問題に關しては、今後の課題としたい。

〔注〕

- (一) 山崎純一『列女傳』上(明治書院、一九九六年)。  
 (二) 大島立子「中島みどり譯注劉向『列女傳』を讀んで」(『中

國女性史研究』一二、二〇〇三年)。書評對象は、中島みどり『列女傳』全3卷(平凡社、二〇〇一年)である。

(三) 池田秀三「劉向の學問と思想」(『東方學報』(京都)五〇、一九七八年)。なお、下見隆雄「劉向『列女傳』の研究」(東海大學出版會、一九八九年)も参照。

(四) 「女四書」は、清初に王相が編修した『女誡』『女論語』『内訓』『女範捷錄』の四種。これらが代表的な女訓書であつたことは、山崎純一「教育からみた中國女性史資料の研究」(明治書院、一九八六年)。

(五) 謂女子無才便是德。故生了此女、不會叫他十分認真讀書。只不過將些女四書・列女傳讀讀、認得幾個字、記得前朝這幾個賢女便了。……(『紅樓夢』第四回 薄命女偏逢薄命郎 胡蘆僧判斷葫蘆案)。なお、『紅樓夢』は上海古籍出版社、一九九一年による。

(六) (劉) 向賭俗彌奢淫、而趙・衛之屬起微賤踰禮制。向以爲、<sup>①</sup>王教由内及外、自近者始。故採取詩・書所載賢妃・貞婦、興國・顯家可法則、及孽嬖亂亡者、序次爲列女傳、凡八篇。<sup>②</sup>以戒天子。及采傳記・行事、著新序・說苑凡五十篇、奏之(『漢書』卷三十六 楚元王傳)。

(七) 宮本勝「列女傳の刊本及び頌圖について」(『北海道大學文學部紀要』三三、一九八三年)。

(八) 劉向所序六十七篇「新序、說苑、世說、列女傳頌圖也」(『漢書』卷三十 藝文志)。

(九) 列女傳十五卷、劉向撰、曹大家注。列女傳七卷、趙母注(『隋書』卷三十三經籍志二)。

(一〇) 古列女傳九卷。……隋・唐志及崇文總目皆十五卷。蓋以七篇分爲上下、并頌爲十五卷。……王同、曾鞏二序辨訂詳矣(『直齋書錄解題』卷七)。

(二) 伯姬者、魯宣公之女、成公之妹也。其母曰繆姜、嫁伯姬於宋恭公。恭公不親迎、伯姬迫於父母之命而行。既入宋。三月廟見、當行夫婦之道、伯姬以恭公不親迎、故不肯聽命。宋人告魯。魯使大夫季文子如宋、致命於伯姬。還復命。公享之。繆姜出于房、再拜曰、大夫勤勞於遠道、辱送小子。不忘先君、以及後嗣。使下而有知、先君猶有望也。敢再拜大夫之辱。伯姬既嫁於恭公十年、恭公卒、伯姬寡。至景公時、伯姬常遇夜失火。左右曰、夫人少避火。伯姬曰、婦人之義、保傅不來、夜不下堂。待保傅來也。保母至矣、傅母未至也。左右又曰、夫人少避火。伯姬曰、婦人之義、傅母不至、夜不可下堂。越義求生、不如守義而死。遂逮於火而死。春秋詳錄其事、爲賢伯姬、以爲、婦人以貞爲行者也。伯姬之婦道盡矣。當此之時、諸侯聞之、莫不悼痛。以爲、死者不可以生、財物猶可復。故相與聚會於澶淵、償宋之所喪。春秋善之。

君子曰、禮、婦人不得傅母、夜不下堂、行必以燭。伯姬之謂也。詩云、淑慎尔止、不愆于儀。伯姬可謂不失儀矣。

頌曰、伯姬心專、守禮一意。宮夜失火、保傅不備。逮火而死、厥心靡悔。春秋賢之、詳錄其事(『列女傳』卷四貞順宋恭伯姬)。

『列女傳』研究序說(仙石)

(三) 伯姬者、魯宣公之女、成公之妹也。其母叫做繆姜。許嫁伯姬於宋、至結□之日、宋恭公以道遠、不來親迎。伯姬不欲往、父母再三遣之。伯姬迫於父母之命而行。既至宋、廟見之後、當行夫婦之禮。伯姬辭說道、親迎婚姻之禮也。彼既不迎親、失禮於妾。妾又安敢失禮、而與之合婚哉。恭公不得已、又使人告於魯君。魯君遣大夫、再三致命於伯姬。伯姬然後從命。而合婚伯姬從恭公十年、而恭公死至景公時、伯姬寡處。忽夜深失火、左右驚慌、請夫人速避。伯姬道、婦人之義、夜不下堂。即欲下堂、亦須保母、傅母相從。然後敢下。左右急召保母、保母至矣。左右又請道、火近矣。保母已至、請速避。伯姬道、保母雖至、而傅母不至、與保母不至同。吾何敢輕行以失義。妾以爲失義而生、不如守義而死。左右再促召傅母。而火已至、伯姬逮於火而死矣。諸侯聞之、無不悲悼、而致財以佐宋之喪費。觀伯姬前後所爲、只是認得禮真不肯稍失也。禮有親迎則爭親迎、禮有合婚則爭合婚、禮有保傅下堂、則爭保傅下堂。至於死於火不計也。雖然(註)〔恭〕公既死猶守禮不失、則(註)〔恭〕公迎娶爭禮、不爲過情矣(『古今列女傳演義』四卷貞順傳)。

なお、原刻(首都圖書館本、「古本小説集成」上海古籍出版社)に所収)は、「莊」につくるが、意により「恭」に改めた。

(三) 滋賀秀三『中國家族法の原理』(創文社、一九六七年)。

(四) 貞姬者、楚白公勝之妻也。白公死、其妻紡績不嫁。吳王聞其美且有行、使大夫持金百鎰・白璧一雙以娖焉。以輜駟三十乘迎之、將以爲夫人。大夫致幣、白妻辭之曰、白公生之時、

妾幸得充後宮、執箕帚、掌衣履、拂枕席、託爲妃匹。白公不幸而死。妾願守其墳墓、以終天年。今王賜金璧之聘、夫人之位、非愚妾之所聞也。且夫棄義從欲者、汚也。見利忘死者、貪也。夫貪汙之人、王何以爲哉。妾聞之、忠臣不借人以力、貞女不假人以色。豈獨事生若此哉、於死者亦然。妾既不仁、不能從死。今又去而嫁、不亦太甚乎。遂辭聘而不行。吳王賢其守節有義、號曰貞姬楚。君子謂、貞姬廉潔而誠信。夫任重而道遠、仁以爲己任、不亦重乎。死而後已、不亦遠乎。詩云、彼美孟姜、德音不忘。此之謂也。頌曰、白公之妻、守寡紡績、吳王美之、媵以金璧、妻操固行、雖死不易。君子大之、美其嘉績〔列女傳〕卷四貞順楚白貞姬傳。

(五) 貞姬者、楚白公勝之妻也。白公死、其妻紡績以爲生。矢志不嫁。吳王聞知其美而有行、使大夫持金百鎰、白璧一雙、親至其門而欲聘以爲夫人。隨即具輜車三十乘以迎之。白妻見了、因辭之道、妾聞①女之從夫、惟有一人。白公在生之日、妾幸已得充其後宮、執其箕帚、掌衣履、拂其枕席、託爲妃匹矣。白公不幸而死、妾宜從死、今既不能。亦欲守其墳墓、以終天年。奈何復云嫁哉。今王所賜金璧之聘、夫人之位、非賤妾之敢聞也。且聞王之聘妾、以妾爲有行也。若棄義而從欲則汚矣。見利而忘死則貪矣。貪汚之人、又有何行而煩王之聘哉。妾又聞忠臣賢愚①從一君、不借人以力、貞女好醜①從一大、不假人以色。豈獨事生者、宜若此哉。即於死者亦如此也。遂反其金璧而不納。吳王賢其守節、號爲貞姬而不強焉。

② 君子謂貞姬廉潔而誠信。詩云、彼美孟姜、德音不忘。此之謂也。

③ 吾獨謂曰、姬之遭人皆謂白姬之守貞矣。白姬之辭善矣。④ 幸也。何幸也。幸吳王一時感悟而不強逼之。使強逼之、不知又作何狀、所謂幸也〔古今列女傳演義〕四卷貞順傳。

(六) 徐母兩目圓睜、厲聲而言曰、汝何虛誑之甚也。吾久聞玄德乃中山嚙子之後、漢景帝閣下玄孫、有堯舜之風、懷禹湯之德。〔好婆子〕。况又屈身下士、恭已待人、世之黃童白叟、牧子樵夫、皆知其名。眞當世之英雄也。吾兒輔之、得其主矣。汝雖托名漢相、實乃漢賊。却言玄德爲逆臣。〔聖婆聖母。漢朝第一忠臣也。〕豈不自恥。如何使吾兒背明投暗、惹萬代之罵名乎。言訖、投筆于地、取石硯便打曹操。(李卓吾本『三國志演義』第三十六回)。

(七) 吾有何面目汝相見、玷辱祖宗之徒、空生于天地之間耳。罵得徐庶、伏于階下、不敢仰視。母自轉于屏風後、少時人忽報曰、老夫人自縊于梁間。徐庶慌入救時、母氣已絕。(死得快活。人生有此等死、大幸也。)(李卓吾本『三國志演義』第三十七回)。

(八) こうした李卓吾本の表現に對して、毛宗崗本が、李卓吾本では母に比べて評價の低い徐庶に關する記述を書き換えることにより、徐庶の孝とその劉備への忠を明らかにするとともに、劉備の仁にも傷がつかないように配慮していることについては、仙石知子「毛宗崗本『三國志演義』における女性の忠」(『東洋の思想と宗教』三二、二〇一五年)を参照。

(一九) 漢末謀士徐庶之母也、賢而有智。先主奔新野、曹操遣將攻之。

徐庶時更姓名單福、爲先主畫策、以火攻大破曹軍。操廉知庶計、以計致其母、逼令爲書招庶。母不從。母能書、操因拘母、陰使人習其書、詐爲庶母寫書遺庶。庶弗知其詐也、見書大哭。遂辭先主歸曹、先主亦謂其有母命、弗強留也。此至謁母、母怒其墮操計、而奔一順卽逆切責庶、潛入臥內、引繩自經死。庶痛恨勺水不入口。後庶雖終於魏、終身不爲設一謀。

君子謂、徐庶母、不爲威惕、不爲利誘。<sup>①</sup>傳曰、教子義方、弗納于邪、此之謂也。輕死亡行之高者也。<sup>②</sup>論語曰、君子殺身以成仁、無求生以害仁、此之謂也(『明刻歷代列女傳』第五卷徐庶母)。

(二〇) 『春秋左氏傳』隱公傳三年に、「石碯諫曰、臣聞、愛子教之以義方、弗納於邪。驕・奢・淫・泆、所自邪也」、『論語』衛靈公第十五に、「子曰、志士仁人、無求生以害仁、有殺身以成仁」とある。

(二一) 『剪燈新話』愛卿傳の詳細な譯注は、竹田晃・小塚由博・仙石知子『剪燈新話』中國古典小説選8(明治書院、二〇〇八年)を參照。

(二二) 宋羅愛卿年十八、適趙氏子。趙入京求仕、卿作詞贈別云、恩情不把功名誤、離筵又歌金縷。白髮慈親、紅顏幼婦、君去有誰爲主。流年幾許、沉悶悶愁愁風風雨雨。鳳拆鸞分、未知何日更相聚。蒙君再三分付、向堂前侍奉、休辭辛苦。官誥蟠花、宮袍製錦、要待封妻拜母。君須聽取、怕日薄西山、易生愁阻。

『列女傳』研究序説(仙石)

早促回程、綵衣相對舞。後因亂爲劉萬戶所虜、誓不就辱、遂自而死(『明刻歷代列女傳』第十二卷羅愛卿)。

〈キークード〉列女傳、劉向、俗本、馮夢龍、汪道昆